「比べる」ことでせまる音楽の魅力
～思いや意図をもって表現できる子どもに～　（４年次）

１．研究テーマ設定の理由

（１）学校提案とかかわって

音楽科ではこれまで３か年にわたって「比べる」をキーワードに，小グループにおける「協同的な学び」の実践・実証を重ねてきた。質の高い「ジャンプある学び」成立の要件として，目標設定をはじめ教材選択や課題設定の良否が挙げられた。また，繰り返される旋律やさまざまな反復のかたちなど，音楽的な要素や音楽の仕組みに注目することで子どもの学びの質が高まっていくことも確かめられた。

本年度は学校提案「学びをデザインする子どもたち」を受けて，音楽科では「比べる」をキーワードに，生涯にわたる音楽的な「自己教育力」の育成につながる要件を明らかにするとともに，「思いや意図をもって表現できる子ども」をめざしたいと考える。

今年度の学校提案「学びをデザインする子どもたち」及び重点目標「３つの対話の充実によって」については，次の４つのことから達成できるようにしたい。

- 学習過程「ひらく→しめす→わかる→できる（開・示・悟・入）」を用意して，子どもの心理的基盤を大切に，聴き合い，学び合う「学級風土」づくりを行うとともに，子どもの育ちが見える題材構成・評価計画を心がける。
- 学年に応じて子どもが使える音楽的言語・用語の層を厚くする。
- 「比べる」活動を用意することで，対象や他者，あるいは自己との多様な対話をつくる。
- 「言葉の吟味，考えの吟味」（秋田 2009）が，言語活動を通して価値観形成へと至る過程で，表現領域の活動にも繋げられるようにする。

①音楽科における協同的な学び

音楽科における協同的な学びは，それぞれの子どもの感じたことをペアやグループ，あるいは集団で共有するところから始まると考える。感じたことを言葉で伝えられる場合もあれば，実際の歌う・演奏する・つくる・聴き合う活動を通して伝えることもあるだろう。

さらに，歌詞や楽譜などの対象や既習内容の中に理由や根拠を見つけて吟味していくのが，協同的な学びだと捉えている。

②音楽科における「学ぶ筋道を考える」ためのポイント

ポイントの１つめは，「対象をしぼる」ことである。

全体をまるごとではなく，「このフレーズだけ」「この楽器の音色だけ」「このリズムだけ」というように対象をしぼって子どもたちに与える。集中するところを示すことにより，逆に全体がはっきりし，子どもたちの対象に対する世界が広がったり，深まったりすると考える。ただし，対象をしぼる条件として，教材での指導内容が含まれていることが必要だと考えている。

２つめは，「基礎・基本といわれる土台を定着する」ことである。

提示された課題に対して，自己の課題意識をもつためには基礎・基本が定着していることが大切である。歌い方を工夫するのであれば，声の出し方をわかっていること，リズムづくりをするのであれば，音符や拍子などの意味を理解していることが必要である。こういった基礎・基本の土台を築くことで課題に対して前向きに取り組む姿勢を得られるのではないかと考える。既習内容を生かした順序立てたスモールステップを積み重ねることにより，子どもたちが楽しく自然に基礎・基本の土台を身に付けるようにしていく。

３つめは，「比べる活動を取り入れる」ことである。

対象や自己との対話を促すための視点として，「比べる」活動を取り入れていく。同じ曲を長調と短調で聴き比べる・楽器の奏法の違いを生かした演奏を比べる・ワークシートなどの授業記録を活用して前時の自分の考えと本時の自分の考えの違いや深まりを比べる等々，子どもたちに意外性を与えるものを比べる対象として用意する。比べることで今までには気付かなかった新しい事実を発見したり，もっと深く考えたりできるようになる。一定のところで止まっていた対象や自己との対話が「比べる」活動を取り入れることで活性化するのではないかと考える。

（２）音楽科でめざす子どもの姿

「音楽が好きだ・歌いたい・演奏したい・作りたい・いろんな音楽を味わって聴きたい」さらに「仲間と一緒に歌ったり演奏したりしたい・仲間が好きな音楽にも興味がある・仲間の音楽表現にも興味がある・気持ちを込めて音楽を表現したい」子どもをめざす。

そのためには，音楽的「知識・理解(knowledge & comprehension)」「技能(skill)」「能力(ability,capacity)」の３つがバランスよく身に付いていることが必要になるであろう*。そこで音楽科がめざす子どもの姿を次のようにした。　(*ここで言う「能力」とは，「思考力・判断力・表現力」の総称である。)

音楽的「知識・理解(knowledge & comprehension)」「技能(skill)」「能力(ability,capacity)」の３つが，音楽的関心・意欲・態度に支えられてバランスよく身に付いている子ども

上の３つを身に付けることで，自分に合った生活スタイルを見つけ，自分を音楽で豊かにし，生涯音楽の基盤を手に入れようとする子どもになっていくと考える。同時に工夫して音楽を表現したり，仲間とのかかわりからも自分の音楽的世界を広げていったりする子どもが育つと考えている。

２．音楽科学習における「学びをデザインする子どもたち」

音楽科学習における「学びをデザインする子どもたち」とは，

①学習したことが使えるようになること　②学び続ける目標がもてること

であると考える。すなわち音楽の学習を通して基礎的・基本的な知識，技能を確実に身に付け，活用する力を育むとともに，目標感をもってさまざまな音楽とかかわりをもつことだと捉えている。

そこで下記〔共通事項〕(抄) に着目し，思いや意図をもって音楽を表現したり鑑賞したりするための基を築いていきたい。

・音楽を形づくっている要素を聴き取り，面白さ，美しさを感じ取ること

・身近な音符，休符，記号や音楽にかかわる用語について音楽活動を通して理解すること

これらは，すぐに身に付くものではなく，定着するためには繰り返し指導を行う必要がある。加えて具体的に「書く」および「ことば」または「からだ」で表す活動も必要となろう。グループで考える・表現するなどお互いに関わり合いながら学びをデザインする子どもたちを育てていきたい。

また，学び続ける目標をもつためには，達成感は欠かせないと考える。「こんなことができた」「表現を聴いてもらえた」と満足した気持ちになることが大切である。達成感を味わうことで，次の活動意欲へつなげていくことができる。ただ，思いや意図をもつことができたとしても，その通り表現できるかは別問題であることも多い。そこで１人では表現しきれない思いや意図をグループやみんなで表現してそれらを比べていくことで音楽の魅力にせまりたい。

（１）　音楽科において私たちが期待する“子どもたちが学びをデザインする姿”

	低学年	中学年	高学年
課題解決	範唱や範奏を聴いて課題を見つけ，見通しをもって学ぼうとする	範唱や範奏，歌詞や楽譜を見て課題を見つけ，学習全体の見通しをもって学ぼうとする	音楽を形づくっている要素に着目し課題解決の道筋を自ら考え，学習活動全般を見通して学ぼうとする
対話	ペアを中心に仲間の考えや演奏にかかわり新たな考えに気づく	多様な考えや演奏に進んでかかわり，他者とともに新たな考えをうみだす	多様な考えや演奏に進んでかかわり，三位一体の対話で自己の変容に気づく
学び方	からだ・うごき・おとを生かそうとする	これまでの学び方を表現の活動に応じて活用しようとする	これまでの学び方を表現や鑑賞の活動に応じて選択し活用する

（表１　子どもたちが学びをデザインする姿）

（２）音楽科における子どもへのみとりと支援

みとりについては，評価規準や評価計画の作成に尽きると考える。支援については教師と子どもの関係をまずつくり，子ども同士の関係づくりへと広げていく。①ICT 機器の活用によって学習状況を把握しやすくする。②ワークシートの内容に工夫を凝らし考えや思いが的確に表現できるようにする。③書き込み状況を記録（コピー等）し，個人カルテとしていくことなどを留意点とする。

（３）事例：５年生の実践から「比べてみよう　～旋律づくり～　」(2012/06/27：本時)

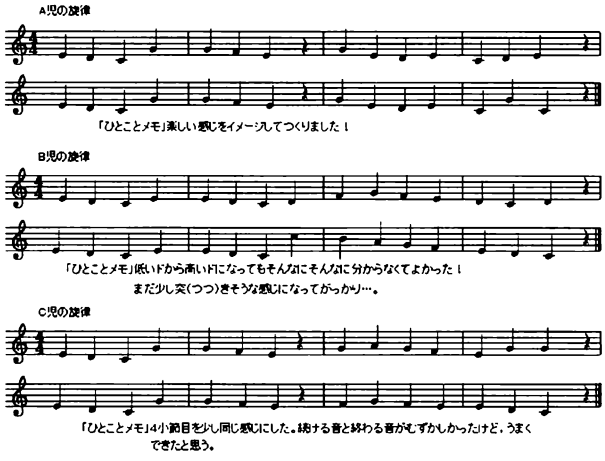
ハ長調の７音音階による二分形式１６小節の旋律づくりである。前時から「ミレド・」の開始モチーフを与えて個別で旋律を作ってきている。本時はそれらをグループ内で提示し合う。学級の子どもたちは，音楽室では１０人×３横列で座っている。本時での３人グループは，これら座席配置のそれぞれ縦列３人で構成した。隣同士にしなかった理由は，積極的なコミュニケーションを必要とするポジショニングを求めたからである。下記例３人の子どもたちはそれぞれにお互いの作品を演奏し合うことから，次の①～③に音楽科での「学びをデザインする姿」を求めた。

①【課題解決】同型反復，同音反復でつくった「はじめ」に続く部分の自然な旋律展開を考えるとともに，半終止，フレーズの反復・変化，終止を使って，自分の意図に気付く。

②【対話】自己との対話→「自分はここまで分かっているぞ」と自分の理解度を確認。他者との対話→旋律線の工夫や教え合い，励まし合い。対象との対話→「できた」「工夫した」という実感。

③【学び方】友達とのかかわり方，自分の表現や工夫を確認する仕方，また，記譜の方法，反復の仕方，終止の仕方，跳躍進行と順次進行の効果など，学び方や基礎的基本的な知識理解事項を駆使して学習に当たろうとする。

◆３人グループの子どもたちの作った旋律



感想の《友達の曲を演奏して》

Aから→Bの曲：低い「ド」から高い「ド」になる所がいい。そして高い「ド」から低い「ド」まで下がる所もいい。→Cの曲：楽しい感じ。“ソラソファミソソ・”のつなぎ方がいい。

Bから→Cの曲：～～～の感じの曲だからきいていて楽しい！／つながっているし，いきなり音も跳んでいないから曲がきれい！／音をうまく利用している！／ソラソファが楽しい感じ！

Aの曲：「ソ」と「ミ」が多かった！／上の段の最後が上がって，続いていた！／最後の「ドソド」が終わる感じ！

Cから→Bの曲：全体的に山（のかたち）になって最後に音が下がっているからまとまっていると思う。

→Aの曲：最後の１小節以外（１段目と２段目が）同じで，最後の１小節の続きと終わり方がいい。

３．研究の展望

音楽科では，子どもたちが質の高い音楽的な力を身に付けるために，「比べる」をキーワードに表現及び鑑賞の楽しい活動を通して，音楽の魅力にせまりたい。思いや意図をもって表現できる子どもを育てるために，以下の方法で楽しみながら学びをデザインする子どもたちをめざす。

① 表現と鑑賞の活動において，「比べる」学習の筋道を明らかにする。

② 集中して聴く（見る）活動から，感じ取ったことを言葉などで表せられるようにする。

③「比べる」活動を「対話」とリンクさせることによって，楽しみながら学びをデザインすることをめざす。

４．研究の評価

①「比べる」活動を行うことで子どもたちの学びの姿が変化したか。その変化を表現にいかすことができたか。

②「比べる」活動を行うことで子どもたちが思いや意図をもって表現することにつながったか。

③演奏の聴取や楽譜などから事実を見つけ，その事実を根拠として「吟味」する音楽的な言語力の高まりから，すべての子どもたちの学びの深まりが見られたか。とりわけ「努力を要する」と判断した子どもたちが改善されたか。

④課題設定の工夫（教材設定の工夫，発問の工夫，課題プリントの使用や一覧表示）によって，すべての子どもたちの学びが変化したか。とりわけ「努力を要する」と判断した子どもの学びが改善されたか。また学級の子どもたちの学びが，客観的に変化の様相を見せたといえるか。